



PUBLIC CANOPY



CITY COMMON



OPEN ARCHITECTURE

出会う - CITY COMMON -

キャンピの下には、行政のワンストップサービス機能、図書館、資料館、レストランやカフェ、行政が市民と一緒にまちの機能を考え運営する「プロジェクトルーム+チャラー」が運営されます。
こうした機能の複合化と再構成によって、多様な市民が出会う場が生まれます。テラスや緑に囲まれた開放的、公共施設が使われ方がオープンに促しあわれ、その様子が展示公開されることで「新しい協働の場」の足みが始まります。

つながる - PUBLIC CANOPY -

大園神社に隣接し、けやき並木と府中街道の間に位置する計画地は、太古からの歴史を守り育ってきた「場所性」があります。府中の中心としての場所性を再度よみがえらせるために神社の柱とつながる天蓋（キャンピ）を敷地全体に架け、さわやかな風が吹き渡る木陰空間のような、半外空間をつくります。この場所は、行政職員と多くの市民がつながる、快適な「まちのパブリックスペース」となります。



Public Canopy 大園神社

周辺に配慮した配置計画

行政機能を高層棟にして、敷地の中央にコンパクトに配置し、近隣敷地から距離をとることで、周辺への圧迫感を低減します。
大園神社からの連続して樹木を植えることで、周辺へのバッファゾーンとし、みどりの空間を創出します。
来訪者は緑陰空間から市庁舎にアクセスすることで開放的に感じやすい市庁舎となることを目指します。

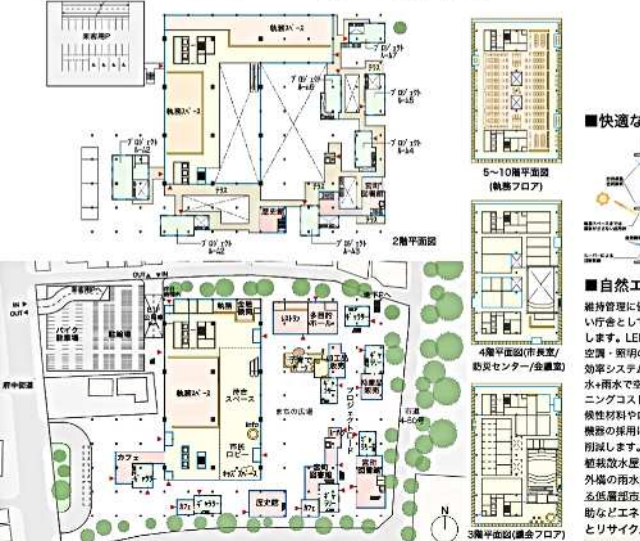
自然植生とつながる緑陰空間

大園神社の参道の線、府中の自然植生が敷地内へと連続し、その隙間に緑陰を配した緑陰空間は、市民のための気持ちの良い歩道空間をつくり出します。

夜を楽しむ安全な光

夜間の快適性と安全性を配慮し、且つ省電力になる照明計画を行います。特に夜間照明は以下の方針とします。
・主要動線に絞りがつくりたくない。
・まちの広場は柱を中心に光を落とす。
・広場に面するエッジ部に壁面照明を。
・回廊アップは、手摺に足元照明を配する。

キャンピ下のまちのパブリックスペースと機能的に積層する高層棟



快速な行政機能空間

維持管理に優れ、機能更新のしやすい庁舎としてLCCの大規模削減を目指す。LED照明等の高効率機器、空調・照明のゾーン分け・制御等、高効率システムを採用。自然光+井水+雨水で空調、電気、水廻りのランニングコストを大幅に低減し、高効率材料やローメンテナンス材料、機器の採用により清掃費、修繕費を削減します。雨水のWC洗浄水、緑陰効果水屋供給水等の再利用、外場の雨水浸透、地中熱利用による低炭素型空調工場の空調補助などエネルギーの循環利用計画とリサイクルの推進を図ります。

自然エネルギーを活かしたエコ庁舎



まちのワークプレイス

一開かれた官民協働空間としての市庁舎の提案

これからの市庁舎は、まちの未来を創造する場所です。それは、市民と行政職員が主体的に参加することで生まれる、活き活きとした協働の場「まちのワークプレイス」です。そのための「空間」と「仕組み」を提案します。



ワークプレイス

ワークプレイスは、
・市民が自由に集い
・公共施設を複層複層活用
・住民参加型まちづくり
・魅力ある府中の情報発信など、
市民と行政が活し、協働する場です。

プロジェクトルーム01 (まちづくり(市民協働本部)) 多様な団体や活動全体のシェアワークスペース
プロジェクトルーム02 (自然環境) カフェの上部にあり、学生からお年寄りまで、多世代が楽しめる。
プロジェクトルーム03 (文化) 市内に数多くある文化施設との相互の連携を図ることで、市民活動が連携されます。
プロジェクトルーム04 (生涯学習) 府中市の総合案内や情報発信を市民活動の場としての活用を推進する情報拠点です。
プロジェクトルーム05 (生涯学習) 府中らしい文化体験のまちづくりを学生や企業と連携して推進していきます。
プロジェクトルーム06 (福祉) NPOやボランティア団体が集まって定期的にミーティングを行います。
プロジェクトルーム07 (子育て) 府中をより住みやすいまちにするため、子育てを支援するためのイベント開催や子育て支援を連携して行われます。

参加する - OPEN ARCHITECTURE -

広場を前にシンボリックに建つ市庁舎ではなく、まちのようなスケール感と多方向に開かれた街区構成によって、「まちに参加し、まちをつくる」市庁舎をめざします。通り抜ける人やむむむ、こどもを遊ばせる人や交差する人など、様々な人々を引き寄せる「賑わいのある場所」となることで、市庁舎が市民の日常生活をつくり、愛着を育みます。そのために、多くの市民が参加するワーキングショップをもとにして、設計段階から主体的な参加意識を醸成し、この場所をつくっていくことが重要と、私たちは考えます。

市民と行政が方向性を共有して進める設計体制とプロセス

まちづくりの連携を担い、市民と行政との協働を促す庁舎づくりは、設計段階からの市民参加により実現します。設計プロセスをオープンにし、段階的に市民連携のプロジェクトを立ち上げ、オープン後を見ええたプロジェクトルームの運営をまちづくりで先行開始します。

市民サービスを維持した安全で合理的な建替計画



工事中の安全利用確保の3要点

1. 一体的利用者ゾーンの形成
仮設庁舎は既存階層をつくるべくに建設し、既存庁舎+仮設庁舎が一体的な庁舎機能を果たす計画とします。
2. 工事期間中と利用者動線が明確な分離
高層棟建設時は撤去アートを府中街道に限定し、高層棟撤去後は既存利用動線を府中街道に集中させることで、常に動線の明確な分離を行います。
3. ワンストップサービスの維持継続
仮設庁舎建設時に既存庁舎内の部室移転を行い、ワンストップサービスの機能維持を行うことで市民利用の動線が単純明快になるよう計画します。

合理的な設計計画の3要点

1. 十分な作業ヤードと搬入路の確保
部室の工事では作業ヤードの確保が十分か否かでコストに大きな差が生じます。特に高層棟建設時の作業ヤードと搬入路をいかに確保し、工期短縮とコスト合理化を行います。
2. 既存地下躯体の合理的な活用
東西西側地下躯体を駐車場として再利用する計画により、解体・山留・掘削作業を軽減します。
3. 新築建築物のプレファブ化とシステム化
現場作業人件費の高騰を考慮し、躯体・外装のプレファブ率を高めた計画とします。

高性能な構造体を合理的に実現する

異なる高さの非対称時に最も重要な役割を果たす市庁舎には、地震発生から構造体による高度な耐震性が求められます。そこで、各用途の要求性能を明確に区分し、それぞれの空間特性に最適な構造体を選定した計画とします。また、建設物価上昇の最大要因である現場の職人不足に配慮し、プレキャスト部材を主体とした計画とします。

災害時に頼れるBCP (事業継続計画) 拠点



日常の人の集まる場が災害時の防災拠点となる

低層部の市民活動スペースや広場は災害時に必要な多機能な対応を可能にし、多岐にわたる復旧・復興活動をサポートします。
日頃から慣れ親しんで利用する場所は災害時のバックアップスペースへスムーズに転換可能です。